

第645回番組審議会報告

2020年2月4日開催

■出席委員

佐藤卓己委員長 佐藤友美子副委員長 今井美樹委員 島田智委員
太平信恵委員 津村記久子委員 東野博昭委員 細見良行委員

■毎日放送出席者

三村社長 梅本専務 木田常務 宮田常務 浜田取締役 岡田取締役
高山取締役 小林ラジオ局長 亘ディレクター
高山コンプライアンス室長 菅野番組審議会事務局長

◆議事の概要

ラジオ番組「大阪とハンセン病」

(2019年12月16日(月)19:00~20:00放送)について意見交換した。

【番組概要】

1907(明治40)年から1996(平成8)年まで、日本は89年間、ハンセン病隔離政策を続けた。現在、全国14か所のハンセン病療養所で回復者が生活しているが、近畿には療養所が存在しない。しかし、昭和の初めまで、大阪にもハンセン病療養所があった。そして戦後、ハンセン病は治る病気になったが、全国で官民あげての「無らい県運動」が展開され、大阪でも一般市民が患者とみられる人を保健所などに密告し、療養所に送り込んだ。隔離政策を推進した国家、それを支えた市民の行動について、歴史の一端を伝える。

【各委員の主な意見は次の通り】

*治療もしてくれるけれども、ドクターも職員も少ない結果、療養所にいた人が強制労働をさせられた。そういった人権侵害が療養所の中でもあったという視点がもうちょっと欲しかった。

*ハンセン病差別の歴史を全体的に俯瞰できるつくりになっていると思う。その中で大阪がどういう位置づけだったのかというのが、番組を通して非常によく整理できていたという気がしたが、この題材をテレビでなくあえてラジオでやることで、視聴者の想像力を刺激する以上の試みが何かあれば、よりよかったと思う。

*戦後、薬ができて治る病気になっても隔離政策を続けたのは何故かを、もう少し掘り下げていただきたかった。聴き終わって、多くの疑問が残った。

*療養所の昔の写真とか、現在地はどうなっているとか、エビデンスになるような書類など、見たいものがいろいろあった。番組を聞きながら見られるホームページをつくり、ウェブ上にアーカイブ構築をすると、ラジオも、もっと面白い、何か新しい別のメディアになるのではないか。

*テレビは集中力を削ぐ要素がいっぱいあるが、ラジオはそれがないから、1回聴くだけで概要をかなり把握できる。テレビでドキュメンタリーを見ても、3回ぐらい見直さないとよくわからないことがある。1時間聴いたら、ある程度は大阪のハンセン病のことが何となくわかるというのはすごく大きいことだと思う。それをうまく利用してもらいたい。

*番組の中でディレクターが自ら、なぜこの番組をつくったかを話したことに驚いた。また、番組の半分が済んだところで、作り手側のディレクターがその後の内容を予告したのがわかりやすかった。こういう方法が許されるのか、とインパクトがあった。

*いままでのハンセン病を取り上げた番組では、国策として何が間違っていたのかと問い、見る側も糾弾する側に立つものが多かったが、この番組は市民の問題として捉えていた。違う視点を持つことの大切さがわかった。

*ハンセン病家族訴訟原告団副団長の黄光男さんの話は、恐らく病気の問題だけではなく在日の問題等、差別の重層性みたいなものが隠れていると思うが、意識してこのドキュメンタリーを聴こうという人にとっては自明なことかもしれないが、一般の人にはそうした重層性がどこまで伝わるのかなと思った。

【番組制作者側の説明、質問への回答】

*今回難しかったのは、昔の外島保養院に関しては生存者がいないということで、そこをどういうふうに聴かせるかというところだったが、あま

りうまくいってない部分があるのではないかと思っている。全体としては、人間はなぜ人間を排除しようとするのか、国の隔離政策と言われるが、それを推進した市民もいた、それは私たち自身じゃないのかということ言いたかった。

以上